

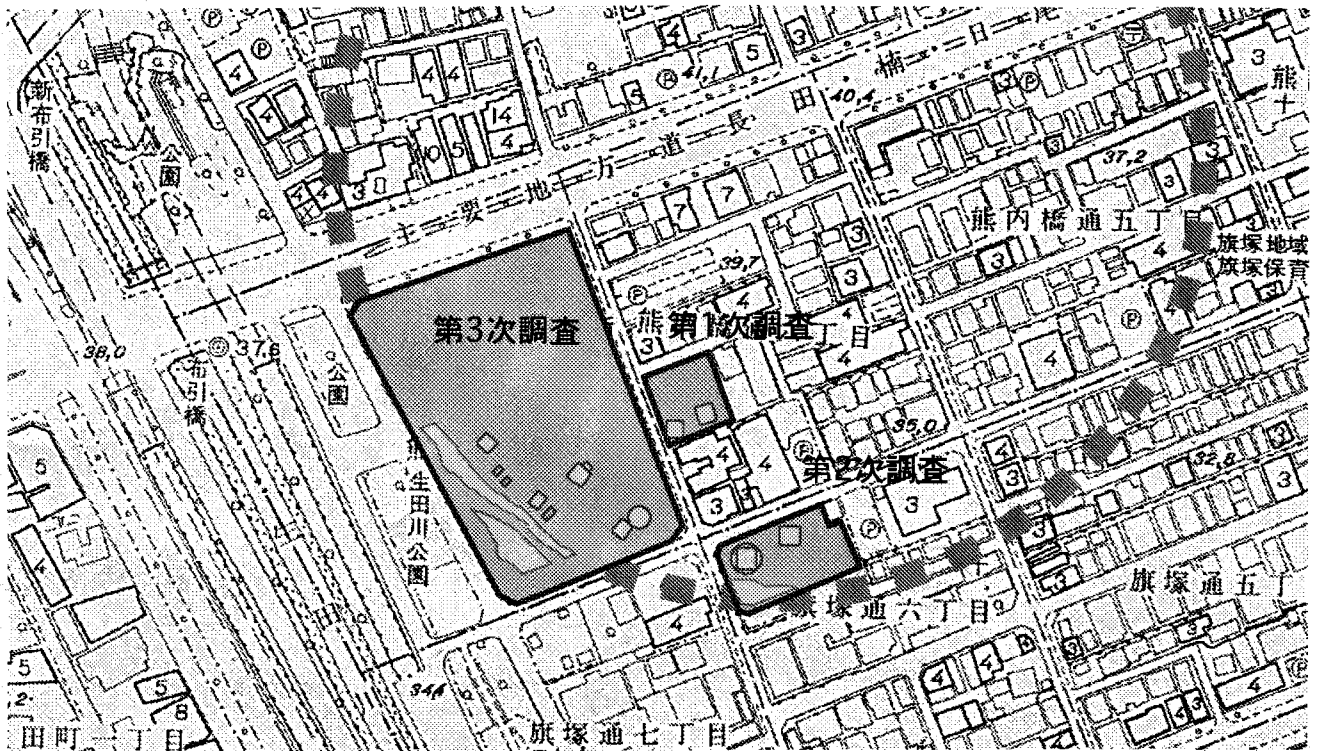
くも ち い せき 熊 内 遺 跡

濠に囲まれた弥生後期の集落

はじめに

熊内遺跡は六甲山系の裾付近に形成された扇状地上に立地する遺跡で、平成元年に初めて見つかりました。これまでに、今回の調査を含めて3回の調査が行われています。以前の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡や大溝が見つかっており、今から約1900年前の弥生時代後期の「ムラ」があったことが判っていました。

今回の第3次調査は、神戸市バス旧布引車庫跡地の発掘調査を行うこととなり、平成13年3月より実施しています。



調査の成果

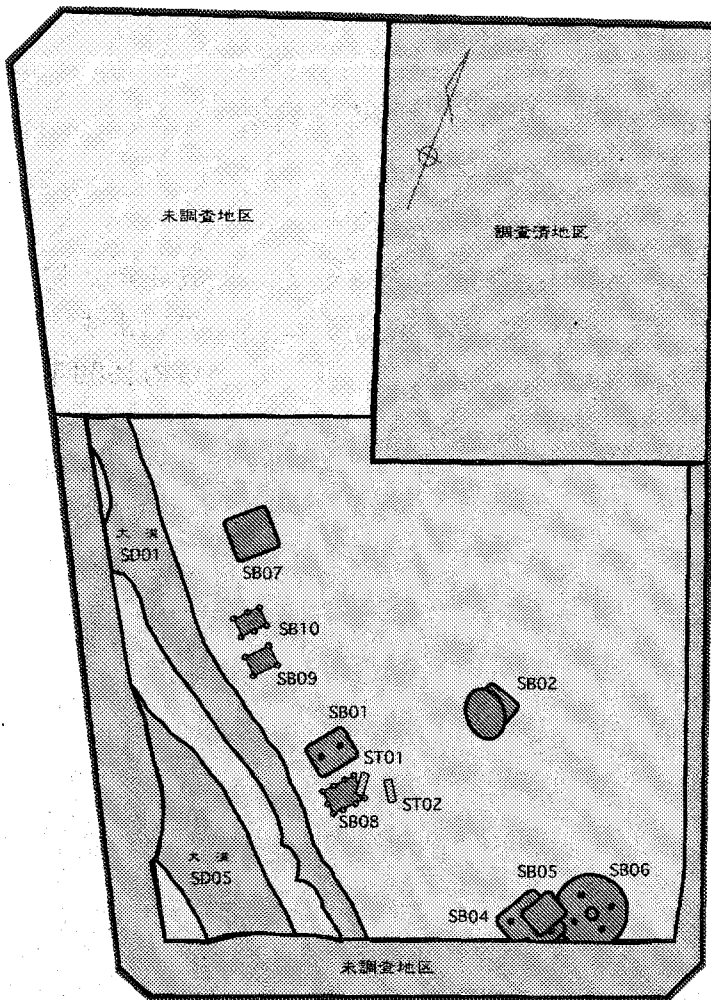
今回の調査地の北東約1/3は、神戸市電の車庫をつくる際に、地面が深く削られたため、遺跡は無くなっていました。しかし、車庫の南側と西側には多くの遺構が見つかりました。

弥生時代後期（今から約1900年前）

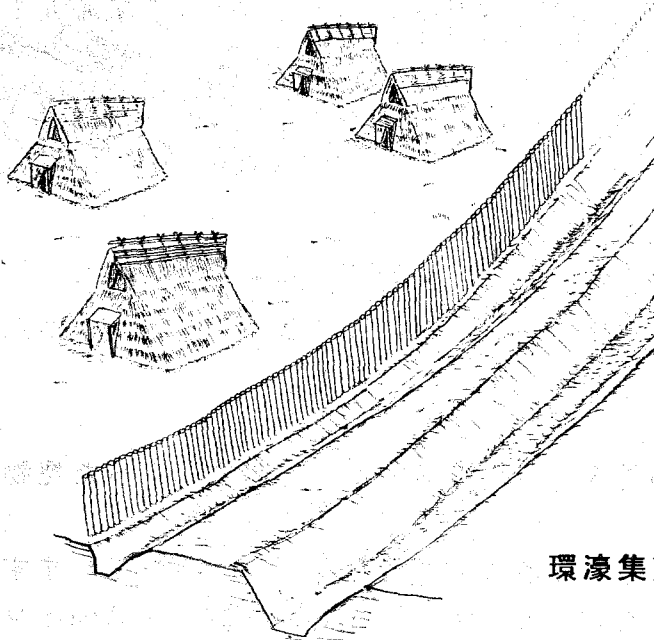
調査地の西半から南にかけて、集落の内外を分ける溝2条と、その中にあった建物跡が見つかりました。

建物跡は、竪穴住居7棟（内1棟は未調査）と掘立柱建物3棟が見つかりました。竪穴住居は、その形が円形のもの1棟（SB06）と、正方形のもの2棟（SB04・SB07）と、やや小さい長方形のもの2棟（SB01・SB05）があります（残り2棟は形が不明）。正方形の建物の内部にはベッド状遺構と呼ばれる1段高い部分が周囲に巡っています。

これらの建物は周囲よりやや高い所につくられており、その高い所を囲むように2条の深い溝（濠）が掘られています。



熊内遺跡（布引車庫跡地）出土遺構模式図



環濠集落のイメージ

以上のように、今回の調査では弥生時代のムラの一部が見つかりましたが、まだ調査途中ですので詳しい事については明らかではありません。今後、引き続いて北西側と南・西の周囲の調査を行い熊内遺跡の実態を明らかにしていきたいと思ひます。

外側の溝（SD05）は幅約10m、深さ約2.5mあり非常に大きなものです。今回の調査地内ではその一部が見つかったのみで、どの様に続くかは明らかではありません。

内側の溝（SD01）は幅約3～4mで、深さは深い所で約1.8mあります。この溝は今回の調査地の南東側で行った第2次調査で見ついている溝に続くもので、「ムラ」を取り囲む「濠」であることが判りました。

これらの溝の壁は急傾斜につくられており、簡単には、はい上がれないようになっています。このような深い溝（濠）に囲まれたムラを「環濠集落（かんごうしゅうらく）」と言ひます。敵から「ムラ」を守るために掘られたもので、当時この地域が、争乱状態であったことが伺えます。

また、溝や住居跡からは当時の人々が使っていた壺・甕・高坏等の土器が多数出土しました。

古墳時代後期（今から約1450年前）

古墳時代後期の遺構として木棺墓が2基見つかりました。そのうち1基には木棺の内部に刀子（とうす＝小刀）1本と須恵器の坏蓋1個が、副葬されていました。この墓の存在から、周辺には古墳時代の集落もあると思ひられます。